



而して此科學或は知識と實行との共通の根源がある筈であるが、それは即ち理性 *reason* である。理性の理論的機能が働いて知識となり、實際的機能が働いて實行となる。而して科學の手の届かぬ、此理性其者の活動發展をあらはす思辨が即ち哲學である。

最後にブートルルの人生觀を略説して、それで本稿を結ばう。

完全な調和的な生は決して先天的概念の對象ではない。これは建設的創造である。凡ての存在物

## 中 島 教 授 薨 去

大正七年十二月二十一日東京帝國大學文科大學教授文學博士中島力造先生薨去せらる。

先生は安政五年正月八日京都府下福知山町に生

は皆それ／＼一の個體であつて、より低い生活形式に歸すことの出來ぬ特性をもつて居る。ある人間と他の存在物との間には、程度の差ではなくて、本質的の差異がある。人は自己の品性の奴隸ではなくて、その創造者である。人の行爲は其人の品性によつて決定されるものではなくて、却て品性はその人の行爲に依憑して居る。我々の存在の根とも云ふべきは「自由」である。これが即ち絶えず我々を驅つて、神に近づかしめる我々の内に於ける創造力である。

## 藤 井 健 治 郎

れ、幼時藩立惇明館に習ひ、長ずるに及んで京都同志社に學び、居ること二年にして笈を負うて遠く米國に遊び、ウエイスターン・ゾルフ・アカデミ

「に於いてパチエラー・オブ・アーツ、ニール大學に於いて、パチエラー・オブ・デヴィニチー、ドクトル・オブ・フイロソフイーの學位を受け、更に英・獨二國を歴遊し、海外に在ること十年にして明治二十三年春三月歸朝せらる。

同年九月東京文科大學の講師となりて、倫理學を講じ、越えて二十五年八月教授に任ぜられ、心理學・論理學・倫理學第二講座を擔任せらる。明治三十二年文學博士の學位を受け、同三十九年帝國學士院會員に勅選せらる。

先生多年帝國の學術界・教育界に盡くされたるの功を以て、大正五年勳二等瑞寶章を賜はり、先生の病篤さや事天聽に達し、特に位一級を陞せられて、正三位に叙せらる。

先生の著書・論文甚だ多く、又大學に於ける講義の稿本にして未だ上梓せられざるもの亦鮮かならず。是等は他日皆一括して全集として公刊せらる

るの機あるを信ず。今既に刊せられたるもの、中廣く世に行はれたるもの五六を摘記すれば、列傳體西洋哲學史・倫理學說十回講義・晩近の倫理學說・絶對派現代倫理學・英國功利説の研究・道德と經濟・現在の自由意志問題等なり。

先生の我が倫理學界に占められたる位置、及び先生の思想體系の變遷等は、他日論述せらるゝ機會あるべし。今姑く之を言はず。唯英國新カント派の倫理學を我が學界に創説せしは先生にして、而して其説天下を風靡し、我が思想界に『自我實現主義』の一時代を劃するに至りたるは、今猶吾人の耳目に新たなる事蹟にして、此の如きは今此に之を言ふを難らず。

先生の學風博く探り遠く窮め、常に兩端を叩いて是非の論を苟くもせず。『徐々に而かも堅實』に問題の核心に接近し、之を闡明するを期したるが如し。先生常に獨逸の學者動もすれば唯異を樹て

新を街ふに急なるの風あるを陋とし、英國のそれ等の學者的良心の篤實なるを高しとしき、先生曾てテイラーが『行爲哲學』を著はして、盛に理想主義の倫理學を罵倒し、後數年ならずして、其説を變じたるを見て、彼は恰も獨逸學者のなすらしきが如く爲せりと難じき、又曾て一人あり、先生と島田篁村先生と並べ評して、彼等は博覽甚だ努むといへども、究に自家の見を有せず、一は東洋の腐儒にして、他は西洋のそれと謂ふべきのみと漫罵せり。先生之を聴き一日余に語て曰く百年にして猶崩壞せざる建築は、堅牢にして廣大なる基礎を要す。余を腐儒といふもの、未だ名匠の地盤の築造に拂ふ細心の注意と苦心とを解せざるの徒のみと、敢て之を意に介せられざりき。又以て先生の學者的用意と態度とを窺ふに見らんか。

先生の性行。氣質を測察するも、其學術と併せて他日其機會あるべし。只、此に余は余等聊か先

生を知るものより之を觀れば、確かに誣妄と認むべき漫評を加へたるものありしを、先生の爲に遺憾に堪へざる旨を言明せざるを得ず。(大正七・一・六稿了)

## 新著紹介

岡本春彦遺稿

矢野 禾 積 編

岡本君が死なれてから早や一年になつた。君の遺稿が矢野氏の努力によつて恰も君の一周忌に出版せらるゝこととなつたのは故人の喜びは言ふまでもなく、我々にとつても君の再生を見る如き喜びがある。爰に「哲人ブルノー」によつて遍く奇才を認められた君は今此の遺稿を我々に贈ることによつて忘れ得ぬ面影を我々の心の上に濃くすることになつたのである。人の世に人程貴きものはないが人の世に亡き人の面影ほど美しきものはない。遺稿はなき人の面影を宿す「魂の塔」である。

ヘツベルの詞に「一にして一切なる神は己自身にも秘密であつた。故に神は己を見んが爲に創造せざるを得なかつた」といふのがある。故人は此の詞を愛讀したのみでなく其精神を身に體して